

## 凡 例

### 1 掲載資料について

- (1) 基本的に既刊の墨書土器集成をひきつぎ、文字と解する資料はできるだけ掲載した。筆ならしの類や筆のはしりが認められない墨痕、転用硯は割愛した。
- (2) 掲げた資料は平城宮内の調査において出土した墨書土器であるが、10世紀以降と思われる資料は割愛した。

### 2 体裁について

- (1) 釈文ないし土器の種類、墨書部位については、調査次数の順に、遺構ごとにまとめて掲載した。同一遺構の発掘次数が数年にわたるものも次数ごとにかけて掲載した。
- (2) まず調査次数を掲げ、遺構ごとにまとめて釈文を示した。釈文の次行には土器の種類、器種、墨書記載部位を記した。釈文の横にPh.として写真図版番号、Pl.として図版番号を付した。

### 3 釈文について

- (1) 釈文はすべて横書きにあらため、原文字の改行は／をもって示した。重ね書きも改行と同じあつかいとした。
- (2) 翻字にあたっては、原則として現行の常用漢字を用いた。ただし一部正字を用いたものもある。
- (3) 残画があるものの、釈読不能のものは□で示し、文字数の確定が困難なものに関しては□□を用いて示した。また、残画から文字を推定したものは〔 ㍊ 〕を用いて□の上に注記した。
- (4) 異筆がある場合は「 」、異筆が数種ある場合は「 」（1）、「 」（2）として記した。
- (5) 習書、文字と認めがたい記号、模様、絵などの場合は、（ ）で注記した。
- (6) 同一個体であるが接合せず、前後関係が不明なものは各破片を(a)、(b)として記した。
- (7) 「十」もしくは「×」のいずれか判断できない記号は、釈文の表記を「×」に統一した。

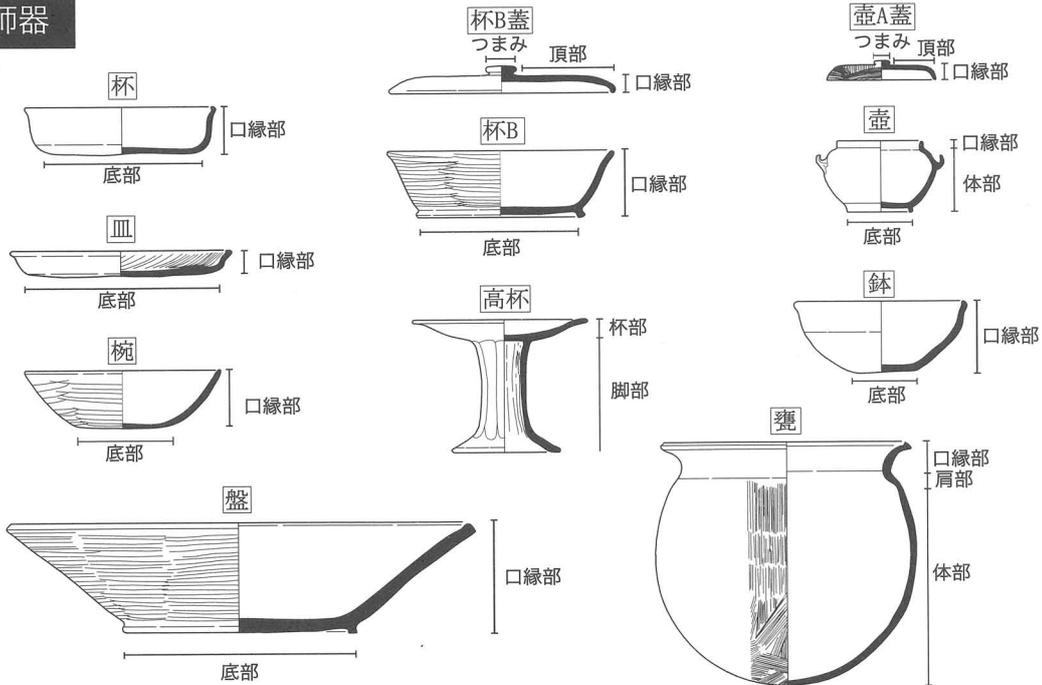
### 4 その他

- (1) 土器の器種については、『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告——長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』（『奈良国立文化財研究所学報』第54冊）に準拠した。なお、器種の特定が困難で「杯または皿」としたのものには、碗も含まれる可能性がある。部位名称については右図に示した。
- (2) 第2章の遺構概説中、平城宮土器編年とあるのは、『平城宮発掘調査報告VII』（『奈良国立文化財研究所学報』第26冊）にもとづく。また、掲載した遺構平面図の座標値は、国土方眼旧第VI座標系による。
- (3) 実測図版、写真図版の凡例は、各中扉の裏に付した。

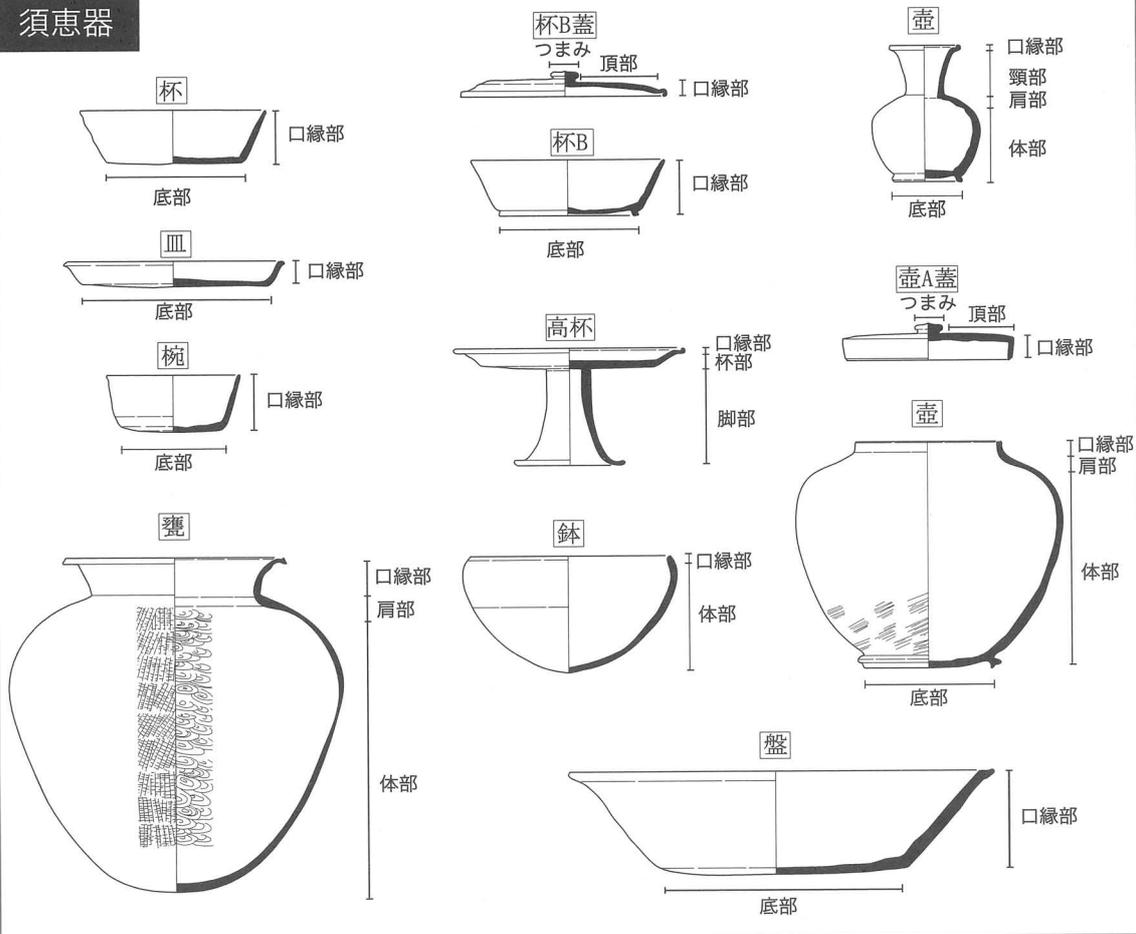
### 5 本資料集の作成について

- (1) 本資料集の作成は、平城宮跡発掘調査部考古第二調査室と史料調査室が共同でおこなった。墨書土器の発掘と資料作成過程における討議には調査部の全員があたった。
- (2) 墨書土器の整理は同調査部考古第二調査室の川越俊一、高橋克壽、金田明大、神野恵が携わった。原稿の執筆、編集は平城宮跡発掘調査部長金子裕之の監修のもと、神野が担当した。また、資料整理および実測図の作成には今津朱美、岡本由佳子、福田清美、丸山美和が協力した。
- (3) 釈文の作成は平城宮跡発掘調査部史料調査室の渡辺晃宏、馬場基、市大樹（現飛鳥・藤原宮跡発掘調査部）、山本崇が担当し、鷲森浩幸、岩宮隆司がこれを助けた。
- (4) 写真撮影は主に平城宮跡発掘調査部写真資料調査室の牛嶋茂、中村一郎が担当し、井上直夫（飛鳥・藤原宮跡発掘調査部）、杉本和樹、鎌倉綾、吉田幸子がこれを助けた。

土師器



須恵器



各器種の部位名称

※器種の詳細については、『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告——長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』(奈良国立文化財研究所学報 第54冊1995) 参照